



ムキは
異世界で精更に
愛されまく。

Mudjums loved
by the sprits.

黒井へいほ
Kuroi Heiho

Hoddums loved by the sprits. CHARACTER
主な登場人物



エルジー

カーラトの町で
暮らす鍛冶職人。

アマリス (アマ公)

オルフェン王国の姫騎士
で、グ雷斯の姉。後先考
えない性格。

リルリ

グ雷斯付きのメイド。主人に
は従順だが、裏の顔も持つ。

グ雷斯 (グス公)

オルフェン王国の第二王女。
「あわあわ」するのが癖。

まないぜろ
真内零

目つきを怖がられるヤンキー。
異世界に転生し、精霊に慕われ
まくる。

精霊達 (チビ共)

岩やマッチのような被り物を
した精霊。零のことが大好き。



第一話 やべえ、死んだわこれ

「お、おい。あれ真内零だぜ」
「ヤクザも避けて通るつて噂のあれか。やべーな、目が超怖え」

「ちげーよ。バツクにヤクザがいるんだってよ」
「ちっ。聞こえてんだよくそが。学校から帰るだけでもこれか。

俺はただ道路を歩いていいだけだ。取り巻きみたいなのが後ろに何人かいるが、それだけだ。
ムカつきながらも、俺はこそそと会話してゐる男共の横を通り過ぎようとした。後ろにいる奴ら
も、こいつらを相手にせず、俺に続くと思つていたんだがな……。

そうはいかなかつた。俺の取り巻き共は、ぼそぼそと噂話をしていた奴らに絡みやがつた。
「おい！ てめえら何こつち見てんだ!? ああ!?」

どうにも我慢ならなかつたみてえだ。

つたく、いちいちどうでもいい奴に絡むんじやねえよ。明らかにビビッてるじゃねえか。

「ひいっ！ すいません！ すいません！」

「零さんに用があるんなら、直接こつちに来て言えや!!」

「ないです！ すいません！」

俺はただ家に帰りたいだけだ。

なのに、しょべえ奴らに絡みやがつて……。

「いいからこつち来いや！」

「ひいいいいいい！」

「やめろ」

俺は取り巻きの右肩を掴んで止めた。

「で、でも零さん、こいつらが……」

「俺はやめろって言つてんだよ」

俺がギロリと見ると、取り巻きは顔を引きつらせて真っ青になりやがつた。

「はい！ お前ら運が良かつたな。さつさと消えろ！」

「あ、ありがとうございます！」

あいつら、慌てて走つて逃げて行きやがる。

ちらちらと後ろを振り返りながら、怯えた目で俺を見てんじやねえよ。俺は何もしてねえだろ。

どいつもこいつも、俺にビビッてデタラメな話をする奴らばっかりだ。

今、俺について來てるこいつらも勝手に付きまとつて、俺の名前を出す。つまり俺を利用したいだけなんだろう。

家に帰れば、家族は俺を化け物でも見るかのような目で見やがる。ちょっと目が怖いくらいでビ

ビりやがつて。

「いやー、それにしても零さんはすごいっすね！ こないだもどつかの馬鹿を、前蹴り一発ノックアウトっしょ！ まじ里斯ペクトっすわ！ ヤクザだつて道を譲りますからね！ 最強の高校生ですよ！」

「ちつ。あいつが弱かつただけだ」

「ははっ。トレードマークの茶髪のざんばら髪が今日も決まってますよ！ ナチュラルヘアってやつっすかね」

こいつは、地毛を入れしてねえだけだと何度言つても聞きやしねえな。

それにも、外を歩けば俺が気に入らねえとケチつけて来る奴だらけだ。喧嘩売られて悪名ばつかり広がりやがる。俺を理解して愛してくれる奴なんて誰もいねえ。

この取り巻き共は、ベラベラとどうでもいいことしか話さない。俺は、さつさと家に帰りてえんだよ。

「そうだ！ 零さん公園で一服してきません？ 飲み物買つてきますよ！」

「俺は家に帰りてえんだけだな……」

「ちよつとだけ！ ちよつとだけお願ひしますよ！」

「ちつ。ちよつとだけだぞ」

断りきれない俺にも問題があるのか、これは。あー、うざつてえ。

俺の返事に、周りの奴らは「さすが零さん」だの「男気が」だの、勝手なことばつか言つて盛り

上がつてやがる。ハイタツチしたり、大声をあげたり……何がそんなに楽しいんだ。

てめえらちよつと俺が公園に付き合うくらいで、騒いで喜ぶんじやねえよ。ちつ。面倒くせえな。道路を挟んで向かい側にある公園に、仕方なく足を向ける。

「あれ？ 零さん、見てくださいよ。公園からボールとガキが……」
「ああ？ それがどうし……」

音が聞こえた。これはトラックの走つてくる音だ。

ガキは気づかず、公園から道路へ飛び出す。俺の方へと向かつてくるボール目指して、真っ直ぐに走つて来る。

やべえ！

「おいガキ止まれ！」

「え？」

しまつた——そう思つたが、遅かつた。

俺と目が合つたガキは、道路の真ん中で止まりやがつた。

くそがつ！ まだ間に合うかもしけねえ！

「くそがあああああ！」

咄嗟に地面を蹴つた俺の手はギリギリで届き、なんとかガキを突き飛ばす。

後は、俺もこのまま避ければ大丈夫だ。

だが……そんな時間はなかつた。トラックは、もう真横にいやがる。

やべえ、死んだわこれ。

そう思つた、次の瞬間だ。

ドンッ！ と強い衝撃が、俺の全身に走つた。

トラックに吹つ飛ばされ、地面に落ちるまでの短い時間のはずなのに、世界がスローモーションに見えやがる。

これがあれか、走馬灯つてやつか。

俺を見てビビッてる奴と、泣いてる奴しか見えねえぞ。

これで終わりか。ビビられ泣かれて、嫌われて終わるのか……。

そこで俺の意識は落ちた。



「くそが……」

あん？ 手が動く？ 痛みもねえ。体も問題ねえ。

俺は体を起こし、周囲を見回した。

見渡す限りの大量の本に、漂う埃(ほりくさ)臭さ。

なんだこりや。トラックに吹つ飛ばされたと思つたら、図書館にいるじやねえか。

……いや、普通の図書館じやねえな。どこまで続いてるのかも分からねえし、異常なくらい本が

ありやがる。

バサバサツ。

本の崩れる音に、俺は慌てて振り向いた。

「こほつ、こほつ。うえー、やつぱり掃除係を雇ったほうがいいかな。……おや？ お客さんかな？」

ほつそい体をした、眼鏡で黒髪の兄ちゃんがいた。

司書ってやつか？ 青白い顔や雰囲気が、まるまるそれだ。

じつと見ていると、当然のように目が合う。だが、すぐに逸らされた。……いつものことだ。

「え、えーと……」

兄ちゃんは俺にビビッてやがるが、そんなことはどうでもいい。俺は自分の知りたいことを聞くことにした。

「おい、ここはどこだ」

「はい！ 記憶や記録の集まるところです！」

何言つてやがるこいつは。記憶？ 記録？ 図書館じやねえのか。

「意味が分からねえ。俺はなんでここにいる」

「え？ なんでつて……。ちよ、ちょっと調べさせてもらつてもいいかな。いえ、いいですかね？」

「ちつ。好きにしろ」

何やら本を開いたり閉じたり、取つてきたり戻したり。

なんだこいつ。俺のことが本の中に書いてあるわけねえだろ。

それともこんな頼りねえ感じだが、実は医者かなんかなのか？

「あー。はい！ ありました！ 真内零。高校二年生。子供を助けようとし、トラックに轢かれ死亡。合つてます……かね？」

いちいち俺の顔色を窺つてんじやねえよ。イラつく『もやしメガネ』だ。

「合つてるけど、合つてねえ。俺は生きてんだる。それとガキは無事だったのか」

「は、はい。子供は擦りむいたくらいで無事でした！ 後、その……あなたは間違いなく死亡しています」

「だから生きてんだろ」

なんなんだこいつは。頭おかしいんじやねえのか？ 話が通じる気がしなくなってきたぞ。

「えつと、ここは生きている人間は来られないんです。ですから、あなたは本当に死亡しています」「生きてる人間は来れねえ？ 死亡してる？ つまり死後の世界つてやつか」

「は、はい。そんな感じです」

ちつ。死後の世界とか本当にあつたのか。どうせ死んだら、みんな消えるだけだと思ってたんだがな。

……死んだ、か。そうか、俺は死んだのか。改めて言われても、あまりショックはねえ。

どうせ嫌われ者だつたしな。ガキが無事だつたら、これで終わりでも上等か。

「分かった。もういい。あんまり信じられないが、俺は死んだ。で、俺はこの後どうしたらいい」「理解が早いですね。認められない人のほうがすごく多いんですけどね」

「どうせ生きてたって、ろくでもなかつたからな。ガキを助けて死んだなら……まあ悪くねえよ」「そ、そんなことはありません！ あなたが死んで、悲しむ人だつています！」

いねえよ。

だが、口には出せなかつた。それはすごく悲しい言葉で、言つたら事実だと認めることになる気がしたからだ。知つてたつもりでも、自分では言えねえもんだな。

「ちつ。それはいいからよ。俺はこの後どうしたらいいかつて聞いてんだ」

「良くありません！ これを見てください！」

もやしメガネは、懐から丸っこいものを取り出して俺に突き出した。

あんだ？ 水晶か？ 占い師とかが使うあれだよな。

「よく見てください」

「お、おう」

さつきまでは俺にビビッてたくせに、凛とした態度で俺に話し始めやがつた。『もやしメガネ』から『メガネ』に昇格させてやるか。

覗き込むと、水晶の中に何かが浮かび上がつてくる。

ん？ なんだこりや。水晶に映つているのは……俺の葬式？ なんであいつら泣いてやがんだ。

「見えますね。あなたが死んで、悲しんでいる人たちの姿が」

俺は、何も言えなかつた。

俺を利用してると思つてた取り巻きの数人。いつも俺にビビッてた妹。学校の何人か。

「零さん！ 零さんなんで死んじやつたんすか！ 無敵だつたじやないすか！」
「おにいちやん！ おにいちやあああああああん！」

あんだよ。俺が嫌いだつたんじやねえのかよ。

あいつら、何勝手なこと言つてんだよ。

荷物を持つてくれた？ 自分から手を出すような人じやなかつた？ 目が怖い？ うるせえ！

あんだよ、これ……。

「あなたは怖がられていたかもしれません。でも、嫌われてはいなかつたんです」

「そんなこと、今さら知つてどうすんだよ。もう俺は死んじまつたじやねえか。それに両親は、肩の荷が下りたような顔をしてるぞ」

「ええ、そういう人もいるでしよう。でも、それだけじやないといふことを知つて欲しかつたんです」

「……おう」

くそつ。目にゴミが入りやがつた。視界が歪んできやがる。

……俺が気づいてなかつただけなのかよ。

でも、もう死んじまつた。今の俺には、どうもできねえ。

このメガネになら、なんとかできるんだろうか。なんとなくそんなことを思つてしまい、俺は聞いてみることにした。

「なあ」

「はい」

「何か、なんでもいいんだ。あいつらに、何か伝える方法はないのか」「すみません……」

メガネは申し訳なさそうに頭を下げた。

「どうか。無理言つたな、悪かつた」

まあ、そりやそんな都合のいいことはねえよな。

でも、少しだけ救われた気がしやがる。水晶の映像が本当かも分からぬのに、俺も単純なもんだ。

「ありがとよ。もういい」

「分かりました。すいません、見せることしかできなくて。でも、知つて欲しかったんです」

「おう、十分だ。ありがとよ」

俺はメガネと目を合わせないようにして、涙を拭ぬぐつた。ばれてねえよな？深呼吸をして自分を落ち着かせる。後はメガネに聞くべきことを聞こう。

「で、俺はこの後どうなるんだ」

「はい。そのことで一つ提案があります」

提案？ 提案つて、天国か地獄に行くだけじゃねえのか？ まあ今はいい気分だからな、どっちでも構わねえや。

「あなたには転生をしていただこうと思います」

「転生？」

転生ってなんだ？ 生き返るつてことか？

「残念ながら、元の世界に戻すことはできません。ですが、異世界にあなたを転生させることができます」

「どうか、よく分かんねえ。どういうことだ？」

「えつと……第二の生を歩むということです」

「第二の生？」 もしかして、みんな死んだら別の場所で生き返るのか？」

メガネはクスクス言いながら首を振つてやがる。何笑つてんだこいつ。

「本当は厳密な審査があるんですがね。あなたに関しては、僕の権限で転生を許可します」

権限とか、メガネが何偉そうなこと言つてんだ。

それとも偉いメガネだつたのか？

いや、このなよつちい面は下つ端へだ。間違いねえ。

「さて、それでは転生させますね」

「おい、俺の返事とかそういうのは……」

「聞いてません！ 転生してもらいます！」

「提案じやなくて強制じやねえか！」

俺の話を無視して、書類？ ファイル？ を開いて、なんかダイスみてえなもんを振つてやがる。

まあ、あとで説明くらいはしてくれんだろ。

それに、第一の生か。そういうのも悪くないかもしねえ。……今度はもうちょっとうまくやる努力をしねえとな。

「はい！ 決まりました！」

「おう。どこに行くことになつたんだ。アメリカか？ フランスか？ それとも東京から北海道になるとかか？」

行つたことねえ場所でも、それはそれで楽しめるだろ。旅に出る気分で、少しわくわくするな。

「いえいえ、魔法と精靈の関係が密な異世界です」

「は？」

「転生者には一つスキルを渡すことになつています。愛されたかつたあなたにあげるスキルは、これです！『精靈に愛されし者』！」

「いや、だから待てって」

「では、いつてらっしゃい!!」

「待てって言つてんだろ!?」

全身に走る悪寒。おかん地面に体が引っ張られていく。いや、これは引っ張られてるんじゃねえ！ 穴？ 穴かこれ？! 足元に穴？!

落ちる、落ちる、落ちる！

「説明なさすぎだろおおおおおおおお！ お前は何者だつたんだああああああああああああああ！」

力を振り絞り、落下しながら質問を投げかけるが――

うおおおおおお！ まじで落ちてるぞこれ！ こんなに落ちたら、結局死ぬじやねえか！

「すみません。自己紹介もしていませんでしたね。一応自分は、死後の世界の最高責任者。あなた

に分かりやすく言うと、神様ですかね。では頑張つてください！」

は？ 神様？ お前は下した端ばメガネじやねえのか？

そんなことを考えながら、俺の意識は体と一緒に闇へ落ちていった。

第二話 なんだこいつら、可愛すぎだろ

――なんだ、俺は寝てんのか？

体が動かねえ。何かが体の上を動いてやがる……。虫？ 虫か！?

「ああ！? んだこら!!」

「!!」

俺は、気合を入れて体を起こした。

ああ？ 何か走つて隠れだぞ。虫か？ まだ体についてんのか？ 体をあちこち確認してみるが……いや、もう何もついてねえ。

てか、どこだここは。

辺りを見渡して目に入るのは、木と草ばかり。

森？ 草むら？ あんて俺はこんなどこに寝てんだ。

……やべえ、夢遊病つてやつか？

確か俺は、学校から帰るどこで……。そういうや、公園からガキが出てきて、トラックに……？
俺は死んだ？ 神だの転生だの聞こえたような？

「体も痛くねえ。つまりここが、異世界つてどこか？」

ところで異世界つてなんだ？ メガネはなんて言つてやがったつけ。

「えーっと、海外がなんとかつて……違ちがえ、それは俺が言つたんだ」

分かんねえ。異世界つてなんだ？

そうだ、いきなり穴に落とされたんだ。

あのメガネ、説明くらいしろや！ 大体、神つてなんだ！ 本当にそんなのいたのかよ。

「ちつ。これからどうすりやいいんだ」

周りは森しかねーしなあ。とりあえず森を出て……うおつ！ 背筋がぞくつとした。虫か？！

「くつそ、まだ残つてやがつたのか！ どこだ!? 背中？ 違ちがえ！ ……首元か！ 捕まえたぞ、

おら！」

首の後ろ側に右手を回し、鷲掴わづかみにしてやつた。

……あんだこりや。虫？ 違ちがえな、なんだこれ。石？ なんか白いもんが生えてるな。

とりあえず引っ繰り返してみつか。くるつとな。

「は？」

はあああああああ！ なんだこれ！ なんだこれ！

石を被かぶつてるガキ！ ……違ちがえ！ 手のひらサイズのガキはいねえ！ 小人！？



「は？ なんだてめえ！ あんで俺にくついてたんだ！」

顔を手で隠してふるふるしてやがる。なんだこいつは。

「おい、聞いてんのか？ 話せるか？」

うお、今度は首をすげえ勢いで横に振りやがった。どうやら、話せないみてえだな。

「あー。俺の言つてることは分かるか？」

何度も頷いている。分かるつてことか。

それにもしても、こいつなんでこんなに震えてんだ？

……そうか、そりやそうだ。俺の目え見てビビッてんだ。忘れてた。

そうだよ。これからは、もうちよと頑張つて周りの奴と仲良くなるつて決めたんだつたな。

目を隠して話してみるか。悪いことしちまつたな。

とりあえずこいつを膝ひざの上に置いて、両手で目を隠してつと。

「おい。これで怖くねえか？」

……いや、だめだろこれ。こいつ話せねえのに、俺が目を隠しちまつたら何も見えないじやねえか。くそつ。これがあれか、異文化交流つてやつか。噂通り、難しいもんだな。

とりあえず指の隙間から覗いてみつか。直接見るよりはいいだろ。そ一つとな。

「……は？」

ちょっと待て、なんだこれ。

もう一回見るぞ。そーっと……。

「はああああああああ！ なんでお前増えてんだよ！」

すげえたくさんいるじやねえか！ 十体くらいいるんじやねえか？

はつ、もしかして俺の体に最初くついてたのはこいつらか？

よく見りや、俺の真似して手で目を隠してる。

なんだこいつら、可愛すぎだろ。やべえな、かなりやべえ。くつそかぶ可愛いぞ。よく見ると、石だけじゃなくて木や花とか水滴みたいなのを頭に被つてる奴もいるな。

すげえ可愛いじやねえか。

でも、まだ震えてんな。……もしかして俺が怒鳴ったからか？

よし、優しく話してみつか。とりあえず、自分なりに笑顔を作つて……。

「おう。……おう」

優しくつてどうやつてやんだ。分かんねえ。

笑顔作ろうとしたら、頬がひくひくしやがる。だめだな。

まあ、優しく話してるつもりで頑張ればいいな。よし、そうするか。

「俺はあれだ、零つーもんだ。お前はなんだ？ 俺になんか用事でもあんのか？」

うお、両手広げてびょんびょん飛び跳ねてやがる。

とりあえず頭でも撫ななでてみるか？ 確か、頭あ撫なでたらどんな女でもイチコロだと、俺の周りにいた奴らが言つてやがったよな。

そもそも、こいつら女なのか？ ……まあいいか。

「おう、悪いな。何言つてるか分かんねえわ」

とりあえず撫でてつと。

あん？ なんでこいつら急に近づいてきてんだ。

そうか、異文化交流つてやつも頭を撫でればうまくいくのか。あの馬鹿のもの話もたまには使え
るじやねえか。それにしても首傾げてる様子が可愛すぎるだろ。

てか、俺のこと怖くねえのか？ 聞いてみるか。

「あー。お前ら、俺のこと怖くねえのか？ 目、怖えだろ？ よく言われるからよ。無理して近づ
かなくともいいぞ」

すぐえ勢いで全員首を横に振つてやがる。俺のこと怖くねえのか。……やべえ、なんか泣きそそうだ。
「そうちか、ありがとな。頭撫でてやるよ」

俺、一生この森にいてもいいわ。

神様も粋な計らいをしやがる。あのメガネが神様つてのは信じねえけどな。

ん？ なんか石の被り物した奴の様子が変だな。ふるふるしながら、指をこつちに突き出してや
がる。

あー、これあれか。ガキの頃になんかの映画で見たな。友達だつけか？ くそつ、嬉しいじやねえか。
「ははっ、おらよ。これでいいか」

ん？ なんだ？ 他の奴らも俺に指を突き出してやがる。
けつ、いいぜ。こうなつたら全員やつてやるよ。ついでに頭も撫でてやらあ！

「おし！ いいぞ、全員やつてやる！ 手は二本あるからな、二列に並べ！」

おお、とてとてと歩いてきちゃんと並びやがつた。

あんた、保育士つてやつはこんな気持ちなのかな？ 俺、今回の人生は保育士になるのも悪くねえわ。
とりあえず片つ端から頭を撫でて、指を合わせりやいいな。たかだが十体くらい……。

「あん？ なんか、お前ら増えてねえか。いや、増えてるよな!? 倍くらいになつてねえか？ 分
裂したのか!? あー、まあいい。構わねえ！ 男に二言はねえ！ 全員かかつてこい！ ただし列
は乱すんじやねえぞ」

倍になつたくらいでガタガタ言う俺じやね……。
いや待て。増えてる。

「お前らどんどん増えてねえか!? どんだけいるんだよ！ くそつ上等だ！ やつてやらあ！」

……ちつ。結構時間かかつたな。しつかり数えてみたら、五十三体もいたぞ。

「うつし！ これで終わりだ。ちょっと聞きてえことがあるから、分かることがあつたら教えてく
れつか」

おお、にこにこしながら首が取れそうな勢いで領いてやがる。本当に可愛いな。
俺をぐるりと囲むちつこい奴らを見渡して、質問する。

「そうだな。まず、お前らはなんだ？ 小人か？」

……どうやら違ひみてえた。一齊に首を横に振つた。

「えーっと。人間か？」

首、横に振つてゐるな。そりやまあ違ちがえよな。明らかに小せえし。

「じゃあ、どつか町とかある場所、知つてつか？」

おお、全員揃つて同じ方向を指差したぞ。しかもちよつと誇らしげな顔してやがる。頭でも撫なでてやるか。なでなで。

「とりあえず、もう夕暮れになつてつからなあ。町は近ちかえか？」

ふむ。どうやら近くねえみてえだな。

「しようがねえな。どつか寝れるところあるか？　あとは飯とか食える場所があれば、教えて欲しいんだけどよ」

なんか少し困つてんな。段々こいつらの考へることも分かつてきた。

ん？　こつちに来いってか。いいぜ、俺はお前らを信じたからな。この先が崖がけでも怒らねえぜ。俺は立ち上がって、手招きされた方向に歩き出した。

なんか、周りをぴょんぴょん飛び跳ねてる奴らと一緒に進むつて楽しいな。和なむわ。

何体かは俺の頭や肩に乗つてやがるが、別に嫌な感じはしねえ。

とりあえず気になることは、肩に乗つかつてる奴に聞いてみつか。

「これ、どこに向かつてんだ？　なんかいい場所知つてんのか？」

首を縦に振つてるつてことは、知つてゐてえだな。

そういや、こいつらつて何食うんだ？　やっぱ俺がその辺で鳥とか捕まえないと云うの？

でも、ナイフも何もねえんだよな。

少し歩くと、森の中でもやや開けた場所に着いた。洞窟もある。

「ここ、お前らの家か？」

首を横に振つてんな、家じやねえのか。つてことは、俺のために案内してくれたのか。

「悪いな。これなら雨わが降つても大丈夫だわ、ありがとな」

おお、全員ピヨンピヨン両手上げて跳ねてやがる。くつそ可愛い。写真にでも撮りてえな。俺、

カメラマンになりてえつて今初めて思つたわ。

ん？　なんかいい匂いがすんな。

洞窟の入口に近づいてみると、火にかけられた丸いもんが見えた。

ありや鍋か？　もしかして飯か？

確認するため、洞窟に向かつて進む。近寄つてみると、やっぱ鍋だつた。野菜（？）みてえなもんがごろごろ入つてて、すんげえ旨なそうだ。

「お前ら、飯作つたのか。ん？　皿？　俺も食つていいのか？　そーゆーか、ならなんか手伝わないといけねえな。鍋は俺が混ぜてやんよ」

俺が鍋をかき混ぜだと、チビ共は嬉しそうにした。

何体かはうまいこと石に乗つて、そつから鍋に色々山菜みたいなのを入れてる。器用なもんだ。あー、いい匂いがすんな。腹が減つてしまつた。

すると完成したのか、水滴の被り物をしたチビが喜びながら俺に器とスプーン（？）みたいなも

んを差し出してきた。

じゃあ食わせてもらうか……つてあれ？ 器持つてるのは俺一人じゃねえか。

「おい、お前らの器も持つてこい」

俺の言葉に反応して、慌てて全員器を持つてきやがった。どつから出したんだが分からんが、ま
あいい。やっぱり飯はみんなで食わねえとな。
うつし、全員に行きわたつたか。

「じゃあ、いただきますつと」

スプーンで軽くすくつて口に運ぶ。

……なんだこれ、くつそうめえ。

「なんだこれ！ くつそうめえな！」

思ったことが口から出るつてのは、こういうことか。チビ共も大はしゃぎだ。

とりあえずその日はみんなで飯食つて、チビ共が用意してくれた寝床で横になつた。
明日は町に向かつてみるしかねえかなあ。

そんで……やべえ、考えられねえわ。すげえ眠い。

そうやつて意識が落ちる中、俺は一つのことを考えていた。

……あれ？ こいつらつてどうなるんだ？ 町に連れてけるのか？

答えは出ねえまま、俺は幸せな気持ちで眠りに落ちた。

第三話 てめえら調子くれてんじやねえぞ！

——おお、今日もいい天気だな。

洞窟から顔を出し、空を見上げると、眩しいお日様が見えた。

あれから五日経つて、森での生活にも慣れてきた。今日は兎でも捕まえて、晩飯を豪勢にしてや
るか。いや、魚を釣るのも悪くねえなあ。

チビ共が色々教えてくれつから、食料調達もどうにかできるようになつてきたぜ。
さて、今日も頑張るとすつかな！

出かける準備をしようと振り返ると、足元でチビ共が何かしてるのが目に入つた。

「ん？ あんだチビ共。おお、絵を描いたのか。うめえじやねえか。三角に四角か、家みてえだな」
絵を見ながら、俺はそれを描いた花の被り物をしたチビを撫でてやつた。

頬つぺたはふにふにしてるし、撫でると喜ぶしで、たまんねえな。

「新しい家が欲しいのか？ なら、造り方教えてくれたら俺がやるからよお。いい場所が他にある
か？ それともここに……違うのか？」

首を横に振つてやがんな。何が言いてえんだ？

他のチビ共も一緒になつて、たくさん家みてえのを描きだした。

家、たくさんのか。……たくさんの家？

「あ」

「どうか、町だ。俺は町に行くつて、こいつらに言つてたんだつたな。

「いやでも、もういいんじやねえか？ 俺はここで一生過ごすわ」

そして零は森の中でチビ共と幸せに暮らしましたどさ。完。

――で、いいと思ったんだがなあ。

どうやら、チビ共はそれじゃ駄目らしい。

もしかしたら外の世界が見たいのかもしれねえな。俺の服を引っ張つて、必死に町へ連れて行こうとしてやがる。

まあ、こいつらが言うなら仕方ねえか。

「おし、分かつた。じゃあ町に行つてみるかあ」

俺とチビ共は身支度を整え、森を出ることにした。

くそつ。五日間だけだったのに、天国みてえな場所だつたな。ここから離れると思うと、少し泣けてくるぜ。

俺はチビ共に案内されながら森の中を進んだ。なるべく歩きやすい道を選んでくれてるらしくて、さくさく進む。こいつら本当に気が利き^(き)やがるな。

「なんだかよお、ピクニックみてえだよな！ こういうのも悪くねえ」

俺の言葉に、チビ共は大喜びで飛び跳ねてやがる。

そうか、そうだよな。よく考えたら、町つてもこいつらの町かもしれねえ。

つてことは、だ。そこに行けば、こいつらの仲間がたくさんいんのか！ いいじやねえか！

俺はこのとき、こんな勝手な想像をしていた。そんなわけねえのになあ……。

少し進むと、森を抜けた。目の前には草原（？）がすげえ広がつてゐる。

その草原の中には、長^(なが)え道が通つていた。

「あんだこれ、石で舗装してあんのか？ 街道つてやつか」

チビ共は俺のことを考えて、石畳み（？）の道のほうが、森よりも楽だと思つたのかもしれねえ。

これまでも歩きやすい道を選んでくれたからな。

だが、俺としては森の中のほうが歩きやすかつた。何より、この道の固え感触^(かくて)がアスファルトを思い出させやがる。

つい、振り返つて森を見ちまう。まあ、でも新しいチビ共に会うためだからなあ。

つと、そこで俺を囲つてたチビ共の動きが変わつた。

道の先を見るみてえだな。何か変わつたもんでもあるのか？

ありや……人、か？ 赤い髪をふり乱した女が、必死な様子で走つてゐる。

おい、段々近づいて来てねえか。いや、間違ひなくこつちに向かつてきてやがる。

ちつ。ここはフレンドリーに接してみるか。この五日で、俺がこいつらとの異文化交流で学んだ

技術を見せてやんよ！

あつという間に目の前にきた女。赤い目に、赤い髪……なんだ、セミロングツリーのか？ 身長は少し低めだな。シャツにミニスカート、さらにマントを羽織つて、俺よりもっと年下に見える。うつし、笑顔でしつかり挨拶してやるか。

「おう！ ちょっと止まれや。こんなどこで何してんだ、てめえ」

「に、逃げてください……ひいいいいいい！ 「ごめんなさいごめんなさい！ 私、悪い者じやないんです！ どうか見逃してください！」

俺の顔を見るなり、女はすげえ勢いで何度も頭を下げた。

あれ？ なんかめっちゃビビられてねえか。親しみやすく話しかけたつもりなんだが……。

「ちっ。待て待て、俺はてめえに危害を加える気はねえ。ただ話しかけただけだ、安心しろ」「すいませんすいません。お金なら持つてるだけ渡しますから！」

だめだ、話にならねえ。参ったな。

ため息をつきながら顔を上げ、前を見たんだが……。

ん？ なんだありや？ 緑色の変なのが二つ、こっちに向かつてきてんな。

「おい、なんだあれ」

「ごめんなさいごめんなさい……はつ。追いつかれた！ 逃げてください！ 私はあれに追われてたんです！」

俺が聞くと、女は思い出したかのように緑色の奴の方を振り返り、突然慌てだした。

「なんだ、悪い奴なのか」

「なんで落ち着いてるんですか!? 早く逃げましよう！」

いや、逃げるのはいいんだけどよ。俺と目を合わせないようにしてる奴に言われるのもなあ。

あ、なんか少し悲しくなってきたわ。日本にいた頃はみんなこうだつたんだが、こっちに来て忘れかけてたぜ。やっぱり森にいれば良かつたなあ。

「何してるんですか！ 逃げないと！ あ、だめです。もう目の前にいる」

お、おお？ 騒ぐだけ騒いで、へたりこみやがつた。

で、なんなんだよ、この緑の奴はよお。石斧（？）みたいの持つて、こっちをニヤニヤ見てやがる。まあフレンドリーにだ、フレンドリーに。

「おう！ めえら何か用か？ こいつビビッてるからよお、ちょっと待つてくれねえか」

「グルルルル」

こいつら、俺のことをちつとも見てねえ。別にいいけどよ。

人と話すときは目を合わせろって教わらなかつたのかよ、このダボ共が。

「に、逃げてください。こいつらは私が足止めします！」

這いつくばつていた女が、足をガクガクさせながら立ち上がる。

おいおい、そんな震えてんのに俺の前に出てどうすんだ。

手を持つてる木の棒みでえな……杖つてやつか？ そんな弱そうな鉈器じや、こいつらに勝てねえだろ。向こうは斧だぞ。

それに、人間話せば分かるつてもんだ。身振り手振りでも十分。俺はそれをチビ共から教わったからな。人間、日々成長つてやつだろ。

「まあ落ち着けつて。まずは話をしてからでもいいだろ」

「モンスター相手になんで落ち着いて話そうとしてるんですか?! 逃げてくださいって！」

モンスター? モンスターつてなんだ。ゲームとかにいるあれか?

確かにこの緑の奴は、それっぽいが。

「グガアアアアアアアア！」

いきなり緑の奴の片方が、斧を振りかざして俺に向かつて……。

「ああ?」

止まつた。

俺と目が合つた瞬間に。

やつぱりこれはあれか、誠意つてやつが伝わつたに違ちがえねえな。

……そんなわけねえよな。この反応は、俺に喧嘩けんか売つてきてたチンピラ共と一緒にだ。

チンピラ共は自分からガン飛ばしてくるくせに、俺と目が合うと一瞬止まるんだ。じつと睨んでるから動きが止まるのか、俺の目にビビッてんのかは知らねえ。

そのチンピラ共と同じつてことは……こいつら、俺に喧嘩けんか売つてんのか?

……だつたら買うしかねえ。

少なくとも睨みつけてきてる目が反抗的つてことは、間違いねえよなあ!!

「てめえら調子くれてんじやねえぞ!!」

俺は緑の奴の片方に勢いよく突っ込んで、前蹴りをぶち込んでやつた。

おお、ボールみたいに吹つ飛びやがつた。

「ギ!?」

残つた緑の奴は、目ん玉むいて飛んでいつた仲間を見てやがる。

「よそ見してんじやねえぞ、こらあ!!」

喧嘩の最中にやられた奴の心配とか、舐なめてんじやねえぞ!

俺はもう一体の緑色の斧を左手で掴んで、思いつきり……右ストレートだおらあ!!
「おらああああああああああ！」

「グギイイイイイイ!!」

右ストレートは、気持ちいいくれえに綺麗きれいに決ました。
うつし。両方ぶつ倒れてピクピクしてやがる。

「え? え?」

赤髪はぽかーんと眺めている。喧嘩慣れしてねえ奴は、大体こんな反応だ。
さてつと。

俺はぶつ倒れた緑二体に近づくことにした。

「ち、近づいたら危険です！ まだ動けるかもしません。逃げるなら今のうちです！」
これだからトーシロは……。

俺は赤髪の言葉を無視して緑の奴らに近づいた。

そして、そいつらに……蹴り！ 蹴り！ 蹴り！ 蹴り！ 蹴り！

「おらおらおらおらおらおら!! 寝たふりしてんじやねえぞこら!! ゃんのかおらあ!!」

「ガフツ、ゲフツ」

「ひいいいいいいいいい!!」

緑共を交互に蹴っていると、うめき声が聞こえやがる。赤髪の悲鳴も交じってる気がするが、そんなことはどうでもいい。

やられたフリをするなんて、喧嘩の常套手段だからな。

「きつちり地獄に送つてやらああああああああああ!!」

「待つて待つて待つてください!! 本当お願いします待つてください!! だつて泡噴いてますよ!? もういいですって！ 本当ごめんなさい！ あ、もう無理……」

ちつ。うざつてえな。

俺は仕方なく、なぜか謝つてる赤髪に従つて蹴りをやめてやつた。まあこれだけやつておけば、すぐには立てねえだろ。

振り返ると赤髪は氣絶してやがる。ちつ。これだから慣れてねえ奴は面倒くせえ。

……そういや、チビ共は大丈夫か？

俺が周りを見渡すと、チビ共は楽しそうに泡噴いて伸びてる緑の上で飛び跳ねていた。ははつ、分かつてんじやねえか。やつぱりこいつらは最高だな。

第四話 で、魔法つてなんだ？

しばらく歩いた俺とチビ共は、街道から外れた草つばらの上に赤髪を寝かせて、起きるのを待つた。……待つた、ものすげえ待つた。声もかけた、肩を揺すつたりもした。

「なんだこいつ、全然起きないじやねえか」

むしろ、少し幸せそうな顔で涎を垂らしてやがる。

「えへ、えへへへ。駄目ですよ。私とこんなにたくさん契約したいだなんてえ。えへへへへ」

駄目だ、話にならねえ。

諦めた俺はチビ共と相談し、ここで野営することにした。

ふざけやがつて。もう夕暮れだぞ。

俺は焚き火のために木を集めて組み、火打ち石をカチカチ鳴らし始める。

その音に反応したのか、赤髪が目を覚ました。

「はつ。精霊！ 精霊？ ここ？ え？」

体を起こしてきよろきよろしながら、わけ分かんねえこと言つてる。